

# 被差別マイノリティのディアスポラ的実存の可能性

笹川 俊 春

広島大学大学院総合科学研究科

## Possibility that a minority to be discriminated can exist as diaspora

Toshiharu SASAGAWA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

### 1 問題の所在

現代の日本社会には近代化の過程で作り出されたマイノリティへの差別という深刻な社会問題が依然として存在している。マイノリティとは一般に少数者、社会的弱者、被差別者を指すが、本論では部落出身者、在日コリアンを総称して「被差別マイノリティ」と呼ぶことにする。しかし、これらの被差別マイノリティには日本人との外見上の差異を認知されにくいという共通点もあり、差別を回避するための戦略として日本社会への同化志向を深化させてきた。そして、その結果として「日本人化」つまり「マジョリティ化」が加速していく。

こうしたマジョリティ化の進行に、1950年代後半以降の高度経済成長に伴う人々の移動という要因が加わることで、マイノリティとマジョリティとの境界はあいまいになり、結果的に誰がマイノリティなのかかわからないという状況が生じた。ここに表面的にはマジョリティの一員として地域社会の中で生活しながら、マイノリティとしての自覚を保持し続けているという現代の被差別マイノリティの特異な存在形態が見られる。

しかし、マイノリティに対する差別は依然とし

て存在する。したがって、マイノリティと見なされること、あるいはマイノリティであると自覚することは被差別者であることを意味することになる。ここに現代の被差別マイノリティに共通する問題が浮かび上がる。それは特にマイノリティ共同体を離脱した人々やその子孫に関わる極めて現代的な問題であり、被差別者という自覚が自己否定的な意味を帯び、「差別される自己」を自己の本質と思い込むことによって深刻なアイデンティティの危機を招来するという問題でもある。特に青年期において、近代的な意味での自己、唯一で揺るぎない自己という幻想に束縛され、その幻想に執着しようとするほどアイデンティティの危機はより先鋭化し深刻化する。

### 2 方法論

マイノリティ共同体からの離脱、告知や名づけによる被差別マイノリティとしての自覚、マジョリティの中での孤立という現代の被差別マイノリティ特有の存在形態は日本社会のマイノリティにのみ固有のものではなく、広く世界的に見られる現象である。そこで、離散を意味するディアスポラとの共通性に注目し、現代の日本社会における

被差別マイノリティの直面する問題をグローバル化した世界におけるディアスポラの直面する問題との共通性において考察すれば、日本というネーションを超えたトランスナショナルな視点から問題解決の具体的な方法を模索することもできる。そうした意図に基づいて、本論では現代の日本社会における被差別マイノリティの存在形態を「ディアスポラの実存」と呼び、次のように定義する。「ディアスポラの実存とは歴史的に形成された被差別マイノリティの共同体を離脱した人々の子孫で、ホスト社会の中で家族単位または個人として孤立した状態で生活しつつ、被差別マイノリティとしての自覚を持っているか、あるいは他者からの告知によって被差別マイノリティとしての自覚を持つに至った人々が自己の被差別性を認識しながら生活している状態」と。

「ディアスポラの実存」という語を新たな概念として提示し、「ディアスポラの実存」がホスト社会においてアイデンティティの危機を克服しつつ、自己を肯定的に捉え、その異種混雑性を保持しながらホスト社会に存在できる可能性を提示する。

### 3 構成

本論の構成は以下の通りである。

序章では、現代の被差別マイノリティをディアスポラの実存と見なすことの意味を確認する。

第一章では、現代を生きる被差別部落出身の高校生や在日コリアンの高校生が被差別マイノリティであることを自覚し、その自覚によって自らのアイデンティティを形成する段階でどのような問題に突き当たるのか、その問題の所在を明らかにし、アイデンティティの危機とは何かを提示する。

第二章では、アイデンティティの形成が主体化＝他者化であることを踏まえ、部落出身者や在日コリアンが「差別するまなざし」を内面化することによって直面するアイデンティティの危機について検証するとともに、ディアスポラの実存に特有のアイデンティティの危機について具体的な事例をもとに考察する。

第三章では、従来の差別撤廃運動が戦略的本質主義の立場を堅持し、差別と闘う主体の構築を不可欠の要素としてきたことに注目し、現代社会におけるその有効性について検証する。具体的にはアイデンティティ・ポリティクスとしての「宣言」を歴史的文脈の中で検証し、さらに、学校の同和教育・人権教育の中で取り組まれてきた「宣言」の事例を取り上げ、その意義と限界、現代社会におけるアイデンティティ・ポリティクスの問題と課題について批判的に検証する。

第四章では、「宣言」に至る過程での学校、とりわけ教員との関係に焦点を当て、教員の関与を明らかにした上で、その意図を具体的な事例を通して考察するとともに、そうした学校や教員の関与がどのような事態を生起させたのかを批判的に検証する。

第五章では、第四章で提起した「宣言」に至る過程での問題を克服しつつ、ホスト社会の中でディアスポラの実存が自己を肯定的に捉え、その異種混雑性を保持しながらホスト社会に存在できる可能性を提起し、結語で現時点での筆者の考察を提示する。

### 4 結語

ディアスポラの実存とは多様なアイデンティティを持つ存在である。しかし、現実には被差別マイノリティとして本質主義的に規定される。そうした規定には「名づけの暴力」が潜在化しており、ディアスポラの実存のアイデンティティの危機を招来するとともに、その多様性を奪ってしまう。そうした状況を変革し、ディアスポラの実存がその多様性を尊重される社会の創造を可能にするための条件とは何だろうか。

ディアスポラの実存はマジョリティの中に埋没した不可視の存在である。そうした不可視の存在が社会的に認知され、その多様性が尊重されるためには、まずはディアスポラの実存が自己の多様性を自覚し、「ありのままの自分」としてマジョリティから承認される可能性のあることを認識する必要がある。本論では、そうした承認の可能性を「ディアスポラの実存の可能性」と呼ぶ。この

「ディアスポラ的実存の可能性」を可能にするための前提として、まずは、人間存在とは受苦的存在、つまり受苦者であるという認識に立ち、そのうえで、マジョリティの側からのディアスポラ的実存に向けた承認の呼びかけが必要不可欠であること、そして、その呼びかけは反差別の姿勢の表明となり、さらに、受苦者の連帯という意味をも帯びる。これが「ディアスポラ的実存の可能性」の一つの条件である。

こうしたマジョリティからの連帯の表明を具体的に想定できる場として、本論では学校に注目する。それは、学校とは原則的に反差別の場であり、同和教育や人権教育を通して、反差別の姿勢を表明してきたし、これからも表明できると考えられるからである。

学校として反差別の姿勢を表明することは、何よりも「差別しない」「差別はいけない」という意思の表明であり、被差別者を受け入れるというメッセージでもある。それが被差別者の側に立とうとする意思、つまり、受苦者であろうとする学校の姿勢としてディアスポラ的実存に届くとすれば、学校＝教師からディアスポラ的実存に向けた連帯の呼びかけとなる。

しかし、問題は「いじめ」が学校からなくならないように、「差別はいけない」というメッセージがディアスポラ的実存に届いたとして、そのことだけでディアスポラ的実存の可能性を保障することにはならないということにある。それは「いじめ」が「いじめる側」の問題であるのと同様に差別も「差別する側」、つまりマジョリティの問題だからである。したがって、問題はどのようにすれば学校の反差別の姿勢がマジョリティに届くのかということにある。

その方法の一つが学校からのマジョリティに向

けた受苦者の連帯の呼びかけである。問題は、マジョリティが自分自身の具体的な体験に根差した苦難に思い至ることにある。それは、言い換えれば、学校教育の中で、すべての子どもたちに自分自身と向き合う機会を設定し、自分自身の内部にある苦難を想起させた上で、それを対象化させ言語化させること、そして、その苦難が他者への共感と理解の回路になることを実感させることと言えよう。

自分自身が苦難を抱えた存在であること、あるいは、現実には他者を差別した経験を持つ存在であること、さらに、他者に差別という苦難を強いる可能性のある存在であること、そうした自己認識に至ることは、「今ここ」という現実を生きる生身の自分自身に苦痛を強いる。そして、その苦痛を通して、ようやくディアスポラ的実存を含めた被差別マイノリティ、さらにはすべての被差別者の差別という苦難や苦痛に思い至ることができるのではないか。自己の痛みに向き合うことなしに他者の痛みに向き合うことはできない。自己の痛みに向き合ってから初めて、他者への共感と理解の回路が開けるのである。

ディアスポラ的実存がアイデンティティの危機を克服しつつ、自己を肯定的に捉え、その異種混濁性を保持しながらホスト社会に存在できること、つまり、「ディアスポラ的実存の可能性」とは、「今ここ」をディアスポラ的実存と共有し、生身の人間として生きているマジョリティがすべての被差別者への共感と理解の回路を持つこと、そして、いつでもそれを表明できる用意のあることと言えよう。道は困難である。しかし、不可視ではあるが確実に存在するディアスポラ的実存に向けて連帯のメッセージを発し続けることこそが必要なのである。